

農山漁村における環境教育の可能性を考える

2010年9月3日から5日にかけて東北環境教育ミーティングが開かれた。東北地方を中心に環境教育にかかわる人たちが、最上川河畔の清川や最上峡、立谷沢川に集い、これからの環境教育について情報交換を行い、地域で実践する際のモデルプログラムを体験した。受入地ということもあり筆者の所属するNPO法人里の自然文化共育研究所では参加者の受付業務を行ったのだが、本当に様々な年齢層、職業の方々からの申し込みを頂き、当初予定していた倍の参加者数となった。あらためて思うのは本当に多様な人たちが環境教育という社会的ミッションに関心を持ち、そして実際にかかわっているという事実だ。環境教育には、生物多様性の豊かな自然だけではなく、いわば「人間多様性」ともいうべきものもその推進にとって不可欠なものなのだと痛感したのである。

環境教育というキーワードは、単に自然を保護し、エコな暮らしを志向するというだけにとどまるものではないようだ。先日、国際協力機構におけるシニア海外ボランティア派遣のミッションを終え戻ってこられた初老の方と一緒に話をする機会を得た。彼もまた環境教育の現代的な必要性を熱く話されていたが、それは環境保全という観点だけにとどまるものではないものだった。彼は言う。海外から日本に戻ってきて、いかに日本が精神的に貧しい国になってしまっているかということを感じた。自然をはじめそこに息づく他の動植物との結びつき、他人とつながりについて思い巡らすことがこんなにも希薄な社会というのは決して幸福なものではない。山形には草木塔という、自然の恵みに感謝し、草木の霊をも慰め敬い、そこから生きる力を育んでいこうとする生活と密着した謙虚な信仰が農村の暮らしの中に息づいている。今こそ、ここから学ぶことが大切なのではないだろうか。

筆者は、これまで農山漁村での社会教育や地域づくりにかかわってきた。しかし昨今、順調に進んでいるかに見える活動が突然うまくいなくなる事例をみると大切なこととして2つの要素があるように思う。それは第1に「プログラム」に特化しすぎないこと、第2にその地域の活動の根本的な思想・哲学・美学を常に見つめ直し続けることである。この二つのことは実は同じことを言っている。集落の草の根で始まった様々な学習活動や地域づくも表面上の活動のプログラムの成否のみにこだわりはじめると、次第にそのプログラムがどう喜ばれるか、そしてそれが儲かるか、効率のいいものなのかということに転化されていってしまう。また活動の根本的な考えを常に見つめ直す謙虚な姿勢がなければ、多様な人々の参加や外部とのネットワークが広がれば広がるほど、逆にそのことが原因となって内部から活動の軸が揺らいでいってしまうことになるだろう。活動発足時の思いや情熱をいかに次の担い手に伝え続けていけるか、これが活動が最終的に成功するためのカギとなる。

農山漁村はまさに人と自然が織りなしかいながら形成された空間だ。そして賛否はあるものの長年にわたって具現化されてきた持続可能なコミュニティであったとも言えるだろう。

う。それは地域を担い続けるための教育システムを内包するものでもあり、また実は閉鎖的ではなくヨソとの不断のつながり合いの中で成立していったものである。

高度産業化の過程でつながりが薄れ分断されていった田舎の地域社会。もう一度多様な人々が手を繋いだ時に、次世代につながる持続可能な社会への絆を取り戻せるのではないだろうか。農山漁村における環境教育にはこうした可能性が垣間見られるように思う。